

がんの痛みをがまんしないで

講演要旨

「がん疼痛治療について」

大阪医科大学付属病院 化学療法センター
助教 桑門 心 先生

医療の進歩や高齢化により、国民の2人に1人はがんになり、3人に1人はがんで死ぬという時代になっており、今やがんは国民病といえます。がん細胞に対する治療はもちろん大切ですが、がんによって出現する症状を緩和することも、その人らしく生きていくために大切な医療です。

緩和ケアチームの活動を通じて感じたメッセージや、痛みの治療の現状や方法について理解を深めて頂ければと思います。

「がんの終末期を自宅で過ごすということ」

つじ・クリニック（高槻市辻子）
院長 辻 宏明 先生

『残念ながらこの病気を完全に治すことはできません。お元気で暮らせる日はあまり長くないかもしれません』と病院の主治医から告げられたとき、どんな方でも驚き、悲しみ、そして絶望的な気持ちになられるでしょう。「なぜ自分だけが」と思われる方もあります。その事実を受け入れることができた後に、残された日々が短いのなら住み慣れた自宅で家族と共に過ごしたいと思われる方々が多くいらっしゃいます。

しかし病状が進んで痛みや苦しさが出てきたら、家では何も治療できないのではないかと、家族もただ見ているだけで何もしてあげられないのではないかと思います。自宅で過ごすということをあきらめる方もまた多くおられます。もちろん自宅での医療体制は病院と全く同じというわけにはいきませんが、症状緩和のための医療用麻薬の使用や必要に応じて酸素吸入や点滴なども行えます。何より自宅には居心地のいい自由な空間と何でも頼める家族がいます。

私達は医師・訪問看護師・ケアマネージャーなどがチームとして連携をとりながら、できる限り自宅で暮らしたいと希望される皆様方をご支援したいと考えております。

今まで経験してきたことを中心に、がんの終末期の方々の在宅医療についてをお話ししたいと思います。

「薬剤による痛みの管理について」

なのはな薬局（高槻市城北町）
高槻市薬剤師会理事 近藤 直緒美 先生

がんの痛みは、持続性の痛みが多く、放置するといつ終わるのかわからないほど長く続くことが多いといわれています。薬剤によりこの痛みを管理できることをお話しします。

医療用麻薬についても、依存に伴う乱用など誤解されがちですが、正しい知識をもって、適正に使用すれば、依存もなく痛みを和らげる非常にすぐれた効果を発揮します。薬剤によって痛みを和らげることができれば、患者ご自身や家族を含め周りの多くの方々も安堵します。我々薬剤師にとってもそれはおおきな喜びになります。

また医療用麻薬の保管・廃棄など、その取扱いについてもお話する予定です。